

「生けるまことの神に仕える」

2018年11月13日

テサロニケの信徒への手紙 ー 1章8節～10節 主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです。彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでもどのように迎えられたか、また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか、更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

パウロとシラスは、テサロニケで、聖霊に導かれ、力と確信をもって、主イエスの福音を語った。すると、ある者たち、ギリシア人のユダヤ教徒や、主だった婦人たちが、心を開き、御言葉を受け入れた。しかし、ユダヤ人たちは妬み、「皇帝の勅令に背き『イエスという別の王がいる』と言っています」と騒ぎ立てた。御言葉を受け入れたクリスチャンたちは動じることなく、主イエスに倣い、愛に生き、希望をもって、交わりを形成した。主イエスが「岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている（マタイ7:24）」と言われたように、固く立ち続けたのである。パウロは、その状況を、「主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、何も付け加えて言う必要はないほどです」と書いている。テサロニケでクリスチャンになった人々の福音の証しが、マケドニア州やアカイア州（ギリシア全土）に、響き渡っている。付け加えて言う必要がないほどであると喜んでいる。パウロは、フィリピ書2章15、16節aで、「そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、命の言葉をしっかり保つてでしょう」と書いている。命の言葉を保つ星がテサロニケに輝いたのである。更に、「彼ら自身（マケドニア州やアカイア州の人々）がわたしたちについて言い広めているからです」と書いている。テサロニケ教会員の信仰についてのうわさが、パウロたちの宣教がいかに熱心なものであったか、また、テサロニケ教会員たちがいかに心を開いてパウロたちを迎え入れたかを、周りに言い広めることになった。福音の証しが更なる証しを呼び、皆に知られるところとなった。パウロの喜びはいかばかりかと思う。

ここで、パウロは宣教の成果を二つ述べている。一つは、「あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、生けるまことの神に仕えるようになったか」である。人生は不確かで、不安定この上ない。だから、神を求め、その導きの下で確かさを得たいと願う。古代は宗教社会であったので、皆、なんらかの宗教団体に所属し、安らぎを求めていた。しかし、それらの宗教は、地上のもの、偶像を神としていたので、その偶像に支配され、奴隷化されていた。パウロは、真の神とは、あなたの生を絶対的に肯定し、主体的に生きる人間に回復させる神であると説いた。偶像から離れて、真の神に立ち帰るようにと勧めた。二つ目は、「どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったか」である。

「この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです」と、神の御子主イエスの復活による救いと、主イエスの再臨による裁きを教えた。そして終末信仰がテサロニケ書一 の大きなテーマになっている。